

保育士養成校における施設実習に対する不安と変化

The Anxiety and Changes for Field Practice at Social Welfare Facilities in Childcare Worker Training Course

小佐々 典靖 ・ 城戸 裕子 ・ 鈴木 靖之

1. 問題の所在

保育士は、2003年の改正児童福祉法の施行より運用が開始された国家資格であり、「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」に従い、多くの児童福祉施設に配置しなければならない福祉専門職となっている。

保育における福祉専門職化と専門性については、さまざまな議論がなされている。まず、保育士の福祉専門職化は、必ずしも平坦な道のりではなかったことが明らかにされている。森合（2014）は、1954年から1979年までは無資格保母を認めており、そのことが保母の専門職化に逆行したと指摘している。また、全国保育士会や全国保育士養成協議会は、専門資格導入に向けた活動を行なったことを示している。次に、野田ら（2011）は、保育士の専門性を構成する要因は、「社会福祉援助力」、「保育士としての力」、「社会人基礎力」で説明できるとした。また、大森ら（2014）は、保護者の期待する保育士の専門性として、「食育・発達支援」、「子育て支援」、「社会的養護」の概念で構成されるとした。保育および保育士の専門性は、多くの議論を経て、深まっていると考える。しかし、福祉専門職である社会福祉士や精神保健福祉士とは、資格取得までの過程は異なる。

現在、福祉専門職である保育士資格を取得する方法は、大きく2つに分かれる。1つは、筆記試験および実技試験で年2回実施される保育士試験を受験し、合格することである。もう1つは、厚生労働省（2015）が定める指定保育士養成校において、所定の単位を取得し、卒業することである。なお、社会福祉士の場合、受験者全員に必ず筆記試験を課しており、さらに受験条件に実習を含む養成校の卒業や現場経験などを課している。一方、保育士の場合、実技試験を通過すれば実習の有無は問われない。また、指定保育士養成校を卒業した場合には、筆記試験および実技試験はないのが特徴である。

保育士資格の取得を目指す者のうち、指定保育士養成校である大学での教育を受けることを選択する者の多くは高校新卒者である。当然ながら高校新卒者は社会経験に乏しい場合も多く、新しい環境への適合が難しい場合も多いと考えられる。また、保育所以外の児童福祉施設との接点がない者も多いことが予測される。このため、高校生以下の者が保育所または認定こども園以外で働く保育士と出会うことは稀であると考えられ、高校生以下の者がその仕事に就くことを想像することは難しいと予測される。例えば、藤沢（2013）は、介護の仕事に関心を持ったきっかけは、「高齢者や障害者が身近にいたこと」が最も多

く 39.8%、次いで「福祉や介護の仕事をしている家族や知人がいたこと」が 37.4%であったことを示しており、社会福祉職の希望と実体験の関連性が高いことを示している。保育所を除く児童福祉施設や障害児・者に対応する社会福祉施設が近隣にあることは多くない状況もあり、大学入学当初に保育士を目指す者の多くは、保育所または認定こども園以外で働く保育士を目指していない場合が多いと予測される。この傾向は、高校生を対象とした先行研究からも示唆されている。広瀬（2013）の調査によれば、保育士養成校への進学を希望する高校生が挙げた進学希望理由は「子どもが好き」、「やりがい」、「自分に向いている」、「お世話になった先生の影響」、「子どもの頃の夢」の順になっている。「お世話になった先生の影響」という高校生自身の体験を基とした希望が上位にあることや、児童福祉法上の児童が「子どもが好き」という回答をしていることから、保育士は小さい子どもへの支援に特化した専門資格であると考えていることが予測される。

現在、保育士は慢性的に不足しており、厚生労働省による保育士確保に向けたさまざまな施策が展開されている。大学生にとって、保育実習 I における保育所以外の社会福祉施設での実習（以下、施設実習）は、初めて保育所以外の社会福祉施設を体験する場となることも多い。しかし同時に、児童や障害者と初めて接する場合、施設実習に対する大学生の不安は大きいと推測される。これらを軽減することは、実習指導側である大学のみならず、将来的に保育士を受け入れたいと考える社会福祉施設側の課題にもなると考える。

施設実習における不安については、多くの先行研究がある。倉本（2009）は、障害者施設実習に対する不安について、「対象者に関する不安」、「知識に関する不安」、「実習生の義務に関する不安」、「働きかけに対する不安」、「体調管理に関する不安」という 5 因子を指摘している。清水ら（2013）は、施設実習における不安要因として、「宿泊を伴う環境の変化」、「実習先での人間関係」、「実習日誌に関する困惑」が多いとしている。また、施設実習前後の意識変化に注目した研究もある。石山ら（2008）によれば、実習前の不安は「接し方」、「先生との関係」、「仕事内容」、「精神面」、「宿泊」、「評価」などが挙げられている。この研究を継続した結果である石山ら（2010）では、コミュニケーションについては低い自己評価にはなっておらず、日誌についても高い自己評価となっており、事前の学習と準備の影響を指摘している。

このように、大学生が施設実習に向かう前の指導が重要である点は指摘されている。これらを基に、施設実習を経験した大学生がどのように考え、学びの経験をし、不安を克服したのかを把握することは、必要不可欠であると考えられる。同時に、受け入れ側である社会福祉実習施設に大学側がどのように働きかけるのかを検討することも重要になる。

2. 目的

本研究は、保育士資格取得を目指す大学生が施設実習に対して抱く不安要素を整理し、その解消時期を示すことにより、より効果的な実習指導を行うための方策を示すことを目

的とする。

3. 方法

本研究の目的を明らかにするため、第一筆者が複数の児童養護施設を訪問し、実習生の受け入れ状況や保育士の採用状況などを確認し、その結果および先行研究を整理した上で調査票の作成を行った。なお、分析は、調査票の集計結果の比較および集計結果を基にした定性分析を中心とした。

3-1. 調査対象者

A 県 B 市内 X 私立大学で 2017 年度に施設実習を終了した大学 3 年生および 4 年生を対象に、保育実習指導Ⅱおよび保育実習指導Ⅲの合同授業の時間を利用して自記式調査票を配布し回収した。なお、本調査票を記入後に提出した者は、2017 年度に施設実習を終了した 46 名のうち、43 名である。本研究では、この 43 名の回答を分析対象とする。

3-2. 調査対象とした大学における施設実習の特徴

X 大学の保育実習は、厚生労働省が示す基準に従っている。ただし、児童関係の社会福祉施設の施設実習受入数が多くないことから、実習先施設は多岐に亘っている。同時に、B 市近郊ではない施設にも実習を依頼している。このため、一定数の学生が宿泊を伴う実習を行っている。なお、2017 年度の施設実習は、宿泊を伴う実習生が 22 人であり、宿泊を伴わない実習生が 24 名であった。

3-3. 調査票の構成

調査票の題目は「施設実習に対する大学生の意識と行動について」とし、調査項目は 13 問とした。調査項目の設問では、選択式の設問を 10 問設定し、自由記述の設問を 3 問設定した。なお、複数回答を選択できる設問は 1 問（問 9）のみとした。

この調査票の尺度は、原則として 4 件法を用いた。これは、大学生の状況変化を確認する項目が多いためである。ただし、4 件法では正しく測定されないと判断した項目（問 12）は 5 件法とした。同時に、非該当もありうる項目（問 5、問 10、問 11）については、それに対応する選択肢を設定した。

調査内容は、以下の通りである。まず、施設実習の存在を知った時期（問 1）、授業開始前の関心（問 2）、実習前の「社会福祉施設での仕事のイメージ」（問 3）を確認した。実習前の「社会福祉施設での仕事のイメージ」は、自由記述とした。次に、施設実習先（問 4）、実習希望との一致（問 5）および実習先決定時点での実習施設類型知識量の自己評価（問 6）を確認した。さらに、不安の有無（問 7）を確認し、最も大きい不安（問 8）を自由記述で確認した。その後、事前学習状況（問 9）を確認した。これらを経て、実際の不安がどのよ

うに変化したのかを確認した。実習直前までに解消したか否か（問 10）および実習中に解消したか否か（問 11）を確認した。最後に、社会福祉施設への印象変化（問 12）を確認し、事前学習しておけばよかった内容（問 13）については自由記述で確認した。これらを終了した後に、基本属性となる学年と性別を確認し、施設実習終了時点での就職希望を確認した。

なお、本研究の性質上、実習前の「社会福祉施設での仕事のイメージ」（問 3）は社会福祉施設への印象変化（問 12）の補足として用い、事前学習しておけばよかった内容（問 13）は、障害に関する項目のみに用いることとした。

3-4. 倫理的配慮

本調査の倫理的配慮として、以下の説明を行い、調査票にも同様の点を明記した。

具体的には、授業内で実施する質問紙調査であっても当該授業の成績には影響を与えないこと、個人を特定されないよう処理すること、学術および教育の改善にのみ使用すること、回答を拒否する権利を有すること、提出した場合には上記の内容を承諾したとすることである。

なお、本調査票は無記名式であり、個人の特がでできないよう配慮しているが、受け入れ人数の少ない施設群については、特定される可能性を残している。具体的には、児童心理治療施設および児童自立支援施設である。これらの施設は原則として各都道府県に 1 施設しかなく、実習生の受け入れも少ないことから、調査票作成時点で統合した。また、両施設で受け入れを許可された男性は 1 名であることから、本研究では施設群での男女間の比較は行わなかった。

4. 結果

4-1. 調査対象者の属性および実習先

X 大学における調査対象は、43 名である。X 大学では施設実習は第 3 学年夏に設定しており、回答者の属性も 3 年生が多くなっている。具体的には 3 年生 39 名、4 年生 2 名、無記入 2 名であった。また、性別は、女性 31 名、男性 10 名、無記入 2 名であった。なお、属性への回答がなかった 2 名は学年、性別共に無記入であった。

次に、施設実習の認知時期（問 1）は、「大学入学前（2 名）」、「入学直後（13 名）」、「大学 1 年生前期（14 名）」、「大学 1 年生後期（8 名）」、「大学 2 年生前期（6 名）」であった。なお、X 大学では、大学入学直後のオリエンテーション、1 年生前期の保育士資格取得に向けた講習、1 年生後期のボランティア活動を推進する授業、2 年生前期の子ども家庭福祉論などで資格取得に向けた施設実習の説明を実施している。

実習先（問 4）は、児童養護施設（10 名）、乳児院（4 名）、児童自立支援施設または児童心理治療施設（4 名）、障害児系施設（6 名）、障害者系施設（19 名）であった（Table 1）。

Table 1. 実習先と実習者数

	実習者数	%
児童養護施設	10	23.3%
乳児院	4	9.3%
児童自立支援施設または児童心理治療施設	4	9.3%
障害児系施設（通所・入所支援）	6	14.0%
障害者系施設（通所・入所支援）	19	44.2%
合 計	43	100.0%

保育士を養成する課程ではあるが、成人を対象とした障害者系施設での施設実習生が最も高く、19名（44.2%）となっている。また、施設実習内で障害を持つ者と関わることが前提となる施設は、25名（58.2%）である。これに児童自立支援施設または児童心理治療施設を加えると29名（67.5%）まで上昇する。児童養護施設にも障害を持つ児童がいることを考慮すれば、多くの大学生が障害児・者との関わりを持つことになる。

4-2. 不安の有無

不安の有無（問7）は、「かなりあった（27名）」、「少しあった（13名）」、「あまりなかった（0名）」、「ほとんどなかった（3名）」であった。この結果より、何らかの不安を抱える者が40名であることが示された。

4-3. 不安要素の抽出

実習先が決定した際、「最も大きい不安」であったことを自由記述で尋ねた（問8）。自由記述内で不安はないと回答した者は2名であり、何らかの不安を感じた者は41名であった。不安の有無（問7）で「ほとんど不安はなかった」という回答を選択した1名は「環境適応」に不安があるとしていた。自由記述の回答には、単語のみで意味の理解が困難なもの、非常に短いものなどもある。コード付けの際には、41名分の自由記述結果を54文節に分け、それぞれにコードを付けた。ただし、同一の回答者が同じ内容を繰り返した場合は、1つのコードとした。同時に、2つの意味のどちらかを意図しているのか不明なものもあった場合には、2つのコードを付した。

これらのうち、5名以上が回答した「子ども・利用者への対応」、「宿泊」、「職員との関係」、「体調管理」、「環境適応」について、以下で検討する。また、子ども・利用者への対応、支援技術、知識不足に分類したもののうち、「障害」に対する不安についても、再検討することとした。

Table 2. 不安要素の抽出結果

カテゴリー	度数	記述例
子ども・利用者 への対応	21	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもとの関わり方について ・利用者とコミュニケーションが上手にとれるか ・利用者との関わり方が分からないこと ・障害のある人と関わること ・乳児と関わるのが今までなかったこと ・コミュニケーションが取れなかったらどうしようと不安でした（職員との関係と共通項目） ・知的障害のある大人の方とあまり関わったことがないのでどのように関わったら良いのか
宿 泊	7	<ul style="list-style-type: none"> ・泊まりのため、朝起きることができるか。 ・泊まり込みだったので、一人で行くさみしさ ・自炊ができるか、朝起きられるか等泊まりに対する不安
職員との関係	7	<ul style="list-style-type: none"> ・職員がきびしい ・職員とのコミュニケーション ・コミュニケーションが取れなかったらどうしようと不安でした（利用者・子どもへの対応と共通項目）
体調管理	5	<ul style="list-style-type: none"> ・12日間体調を保てるか ・2週間過ごせるかどうか
環境適応	5	<ul style="list-style-type: none"> ・生活（食事） ・慣れない環境
支援技術	3	<ul style="list-style-type: none"> ・介助のしかた
知識不足	3	<ul style="list-style-type: none"> ・その行く施設についての知識がない為、どのような実習なのかが不安
日 誌	2	<ul style="list-style-type: none"> ・日誌を帰ってから書くことへの不安
費 用	1	<ul style="list-style-type: none"> ・交通費
合 計	54	

4-4. 不安要素の変化

調査票では、どのような形で不安が軽減または解消されるのかを確認するため、自主的な事前学習の内容を確認し、施設実習直前までに不安がどのように変化したのかを確認し

た。その後、実習中に不安が軽減されたのかどうかも併せて確認した。ただし、学習を進める中で新たに発生した不安は対象外とした。

4-4-1. 施設実習前の学習

不安要素についての自由記述の後、実習の事前学習として、授業以外でおこなった工夫や努力を確認した（問 9）。なお、大学から示された課題や事前指導内での講話などは除いた。

今回の調査では、調査対象の 41 名中 10 名は「特に何もしていない」と回答した。その結果、31 名は何らかの事前学習を自主的に行ったことが明らかとなった。

事前学習の多くは、文献やインターネット上での検索などを中心としており、積極的にボランティアや見学に出かけた大学生は少ないことが示された。なお、その他のうち、1 名は文献検索を丁寧に示したものであり、1 名はボランティアとしていた。残りの 4 名は共通しており、「先輩（前年度の実習生）から話を聞いた」としていた。

Table 3. 事前自主学習の実施状況

	度 数
図書館やインターネット等で社会福祉施設 (実習先以外・カテゴリー不問) について調べた	24
実習先以外の社会福祉施設に見学に行った	1
実習先以外の社会福祉施設にボランティアに行った	3
実習先に見学に行った (事前訪問を除く)	0
実習先にボランティアに行った	2
特に何もしていない	10
その他	6
合 計	46

注) 複数回答をした大学生もいるため、41 名にはならない。

「子ども・利用者への対応」に不安があると回答した大学生のうち、実習先でボランティアを行なった大学生は 1 名であった。また、実習先以外でボランティアを行なった大学生も 1 名であった。同時に、「子ども・利用者への対応」に不安のある大学生のうち、3 名は「先輩（前年度の実習生）から話を聞いた」とした。

「宿泊」に不安がある者については、実習先でのボランティアを実施した大学生は 1 名、先輩（前年度の実習生）から話を聞いた者が 1 名であった。

「職員との関係」、「体調管理」、「環境適応」を不安と感じた者で、実践に即した積極的

な関わりを行なった大学生はいなかった。

4-4-2. 施設実習直前までの不安要素の改善

実習直前までに不安が解消されたかどうかを確認したところ（問 10）、「解消された（0名）」、「どちらかと言えば解消された（8名）」、「どちらかと言えば解消されなかった（11名）」、「解消されなかった（21名）」という回答を得た。なお、不安がない場合に備えて設定した「初めから不安は全くなかった」は3名であった。不安について確認した設問（問 7）のうち、不安が低いグループは「あまりなかった（0名）」、「ほとんどなかった（3名）」であり、この3名と「初めから不安は全くなかった」を選択した3名は一致した。

今回、調査票では4件法を用い、母集団を「不安が解消された群」と「不安が解消されなかった群」の2群に分けて分析を行なう予定であったが、当初の予想よりも「不安が解消されなかった群」が大きく、比較が不可能となった。また、どちらかと言えば解消された8名についても、ボランティア活動や訪問の効果があつたと推察される者は2名に留まった。

4-4-3. 施設実習中の不安要素の改善

実習中に不安要素が解消されたか否かを確認したところ（問 11）、「解消された（26名）」、「どちらかと言えば解消された（8名）」、「どちらかと言えば改善されなかった（2名）」、「改善されなかった（4名）」となった。施設実習直前までの不安について確認した前問同様、設問（問 7）のうち、不安が低いグループは「あまりなかった（0名）」、「ほとんどなかった（3名）」であり、この3名と「初めから不安は全くなかった」を選択した3名は一致した。

今回の不安要素を確認すると、実践現場で解消されるものが多数あると考えられる。例えば、「宿泊」や「職員との関係」に基づく不安は、事前訪問だけでは改善できない場合もある。不安を抱えた40名のうち、不安が解消された群は34名となり、不安が解消されなかった群は6名に留まった。この点も前問同様、群間比較は困難であると判断した。

ここで分析すべき点は、どのような不安が解消されなかったのかという点である。最も多かったのは、「宿泊」への不安であり、6名中3名であった。なお、「どちらかと言えば解消されなかった」と回答した2名は、この項目に当てはまる。3名の「宿泊」に対する不安は、実習終了まで続いたということになる。その他は「子ども・利用者への対応」、「体調管理」、「職員との関係」、「支援技術」の4カテゴリーであり、すべて1名ずつであった。

4-5. 障害に関する不安の変化

この項目は、前項までに検討した内容を再精査するものである。施設実習では、多くの大学生が障害児・者に関わることになる。X大学は障害児に対する特別支援教育を学ぶこと

ができる。しかしながら、実際に障害当事者と大学内で関わることは多くなく、ボランティア活動などによって体験していない場合、積極的に関わる機会は多くない。実習先決定直後の不安（問 8）では、障害児・者に接することへの不安はあった。障害児系施設および障害者系施設で実習する予定であった者（問 4 で 4 または 5 と回答した者）25 名のうち、13 名が利用者への関わりに不安があると回答した。また、支援技術に不安がある者もいた。このように、障害児・者と関わり方に不安を感じている大学生が多いことが示された。ただし、前述の通り、積極的にボランティアなどに参加した者は多くないことが示されている。

次に、障害児・者施設での実習後に「事前に学んでおけば良かった」と記述した内容を確認した（問 13）ところ、全 25 名中、自由記述をした 16 名のうち、15 名は「障害がある方と、事前に関わる機会を作っておけば良かった」、「障害について知識を身に付けておけば良かった」、「様々な場面での介助方法」などを挙げ、知識の取得、関係性の構築方法、支援技術などを学ぶべきであったという回答をしている。

4-6. 社会福祉施設での仕事の印象の変化

社会福祉施設での仕事の印象（問 3）を確認し、その変化を確認した（問 13）。

その結果、当初の印象（問 3）では、ポジティブな記述はなく、事実の記述（21 名）と「大変そう」などネガティブな記述（22 名）に二分された。

これらを基に、社会福祉施設での仕事の印象がどのように変化したのかを自己評価した（問 12）。この設問では、小倉ら（2009）の結果同様、良い印象になる傾向が確認された。具体的には、「良い方へ変わった（16 名）」「どちらかと言えば良い方へ変わった（27 名）」となり、「変わらなかった」、「どちらかと言えば悪い方へ変わった」、「悪い方へ変わった」と回答した者はいなかった。なお、実習先と希望の乖離を確認した際（問 5）、障害者系施設を希望するとした群は 4 名のみであったが、障害者系施設で実習を行なった 19 名すべての印象が好転したという結果となった。この結果は、土谷ら（2015）の研究結果とも一致する。

4-7. 実習終了後の就職希望

最後に、属性として質問した就職希望先を整理する。有効回答は 42 名で複数回答も可とした。

その結果、保育所または幼稚園を希望する者が最も多く、27 名となった。多かった順に、障害児・者系施設（7 名）、子どもとは関わらない一般企業（6 名）、障害児を除く児童系施設（5 名）、子どもに関わる一般企業（4 名）、その他（4 名）となった。

5. 考察

5-1. 施設実習の不安要素構造

ここまでの結果を踏まえ、まず不安要素の構造とその解消のための方策を検討し、次に実習前に改善可能な不安と実習中に改善可能な不安に分け、考察を加える。さらに、実習受け入れ施設との協働の必要性と本研究で言及できなかった課題を示す。

不安要素のうち、知識不足や経験不足から生じる不安と実習を始めてみないと解決しない不安があると考えられる。それぞれの不安を再整理した (Fig. 1)。

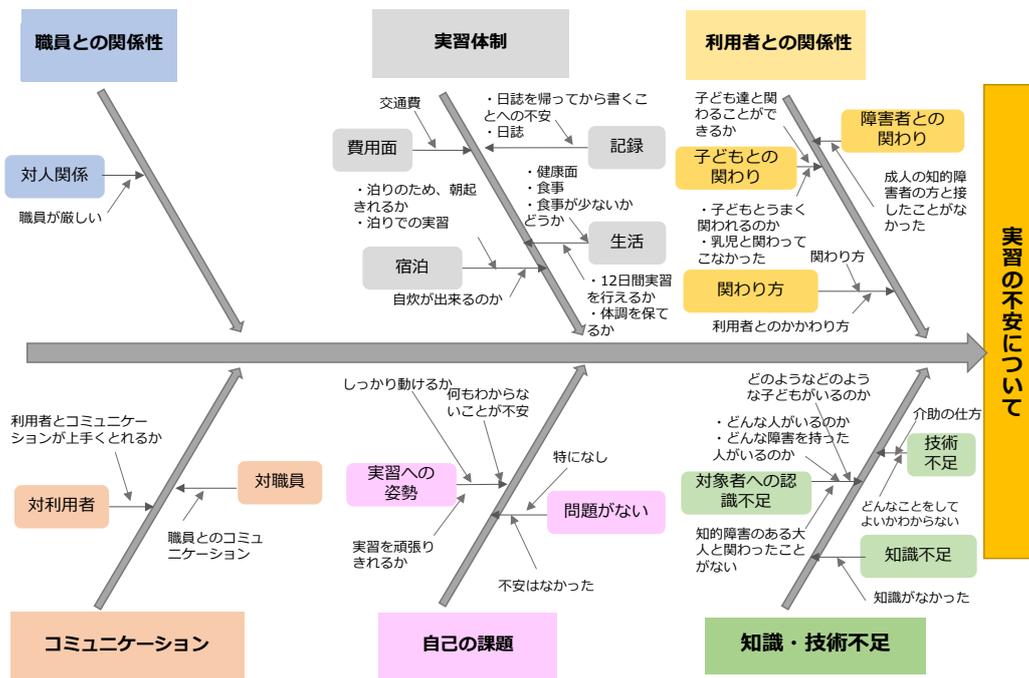


Fig. 1 施設実習の不安要素構造

ここでは、上段に実習先で解消可能な不安要素をまとめ、下段に事前に軽減可能な不安要素をまとめた。下段の不安要素を事前に解消または軽減することにより、上段の不安要素を軽減することができるという構造である。このため、コミュニケーションを独立した項目として示した。これは利用者との関係性および職員との関係性に含まれるものである。また、出会ったことのない他者とのコミュニケーションが不安感を高める要因になると考えられる。実際の問題として、利用者との関係性や職員との関係性は、大学生のコミュニケーション能力の高低に依存する場合も大きいと考えられる。職員との関係性については、その大学生と実習指導者との相性に依存する場合も大きい。利用者や職員と良好な関係を築くためにも、対人関係能力の向上は不可欠であると考えられる。ただし、これを実習の事前指導内で行なうことができるかどうかという点には議論の余地がある。

なお、不安要素の先行研究との比較では、本研究の結果と倉本 (2009) や石山ら (2008)

などの先行研究で示された項目と大差はないことが示された。敢えて言えば、「実習生の義務」や「評価」に関する不安が表面上はないという点である。しかし、「職員との関係」や「日誌」は、「実習生の義務」や「評価」への不安に繋がると考えられる。少なくとも、本研究については、地域性や大学の差異による変化は少ないことが推察される。

5-2. 実習前までに改善可能な不安要素

実習前までに改善可能な不安要素は、実際に経験してみないと分からない項目以外ということになる。ただし、一部はボランティアや事前訪問などで改善できる可能性はある。X大学の場合、事前の自主学習でボランティアなどに取り組む大学生はごくわずかであり、この点は改善すべき点であった。以下では、各不安要素について、改善時期を検討する。

まず、保育実習の事前指導で確実に改善できる項目は、「支援技術」、「知識不足」、「日誌」である。X大学の日誌は、時系列で行なう記録とその日の活動で印象的なエピソードをまとめる記録の2つに分かれる。前者については丁寧に学ぶ大学生にとっては大きな問題はないが、エピソードでは気付く力を求めており、実際の場面を想像できない場合には困難を伴うことも予想される。これらを習熟させるための指導法の確立が必要となる。しかしながら、さまざまな施設群への実習指導を15回で実施することは実質的に難しい。X大学でも、事前に施設類型ごとに資料配付を実施しているが、施設類型に沿ったエピソードをまとめる記録の指導・添削は、現在のところ難しい状況であると考えられる。これらを円滑に指導するためには、実習講師または実習助手の採用も含めた実習指導体制の変更と実習センター機能の構築も検討すべきである。

次に、「子ども・利用者への対応」、「宿泊」、「職員との関係」、「体調管理」、「環境適応」は、実習を始めないと分からない不安要素であると考えられる。ただし、これらの不安要素については、疑似体験をすることにより軽減させることができると予測される。例えば、「子ども・利用者への対応」については、同一種類の施設や実習先でのボランティア活動により、その不安を軽減することができる。また、宿泊時の自炊への心配なども、同様に軽減である。当然ながら、これらの不安要素を改善するためには、大学生自身が主体的に行動する必要がある。今回の研究では、積極的に実習先などに出向き、学ぶことは少ないという結果が明らかとなった。一般的に4年制大学のカリキュラムは、短期大学と比較すると時間の確保は容易であり、X大学の場合にはボランティア活動を推奨しているが、社会福祉施設でのボランティア活動にはあまり積極的ではないことが示された。また、実習先決定の公表は4月であり、施設実習は8月初旬から実施される。これは、保育所実習が終了した者が施設実習の対象となるためである。本研究により、社会福祉施設での実習が必修であることを認識するのは、1年生の前期までが大半であるが、2年生の前期まで認識していない大学生もいることが明らかになった。不安要素の改善に向け、早期に社会福祉現場を体験できるカリキュラムの設定が必要になると考えられる。

5-3. 実習中に改善可能な不安要素と実習受け入れ施設との協働

先に示したとおり、「子ども・利用者への対応」、「宿泊」、「職員との関係」、「体調管理」、「環境適応」は、実習中に不安要素を軽減できる可能性が高い要素である。これらについては、実習受け入れ側の対応により、不安が軽減される程度にはばらつきが発生することが予測される。不安感の強い大学生については、その情報を実習受け入れ施設と大学が共有し、事前に環境を整備することにより、大学生が安心して学べる場の提供が可能になると考える。

また、実習受け入れ施設側から見れば、将来的な保育士確保の機会ともなり得ることを考慮した指導が必要となる。実際、X大学の卒業生の中には、実習を行なった保育所または社会福祉施設に就職する場合もある。実習前のボランティアの受け入れが増えれば、社会福祉施設がより身近な存在となる。社会福祉施設への関心を持つ保育士の養成のためにも、実習受け入れ施設と大学との実習指導中からの交流が求められると考えられる。

5-4. 残された課題

本研究は、大学生の不安感に焦点を当てたものであるが、そもそも不安感が全くない状況での実習が望ましいのか否かといった議論も必要である。しかし、貴田ら（2012）によれば、不安感が低い方が、より実習に取り組みやすくなるとしていることから、本研究の方向性は妥当であると考えられる。

本研究は教育プログラムの改善を目指す上で大きな障壁となると考えられる不安要素の変化を取り扱った。上記の議論は、教育効果という視点から再分析する必要がある。本研究ではより質の高い施設実習を行なうためには不安要素を取り除く必要があるという点からのアプローチを中心としたため、特に中長期的な教育効果までは分析対象とすることはできなかった。この点は、今後の課題としたい。

6. 結論

本研究において、9つの不安要素が抽出され、改善された時期を調査票の集計結果から示した。抽出された不安要素は、「子ども・利用者への対応」、「宿泊」、「職員との関係」、「体調管理」、「環境適応」、「支援技術」、「知識不足」、「日誌」、「費用」である。同時に、それぞれについて「どの時点までに改善可能か」を考察した。これらを不安要素構造として整理し、それぞれの不安要素がどの段階で改善されるのかを示した。その結果、実習指導内で改善可能な不安要素、実習中に改善可能な不安要素に分け、実習先との協働の必要性を示すことができた。本研究においては、多くの不安要素が実習中に解消されていることが示されている。これらの不安要素を可能な限り、実習前に緩和する必要があると考える。そのためには、教育体制の改善を含め、課題が残されていると考えられる。なお、サンプル

ル数の関係上、詳細な分析結果の公表はできないが、これらの結果を X 大学および社会福祉施設側にフィードバックする。これらを活用することで、大学生の不安を可能な限り抑えることが可能となり、質の高い施設実習が可能になる。同時に、社会福祉施設との協働体制の整備と学内におけるきめ細やかな実習指導体制の構築を進めて行くことが求められる。

引用文献

- 藤沢緑子. (2013). 介護の仕事に対する高校生の意識. 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要, (17), 23-32.
- 広瀬由紀. (2013). 高校生が抱く保育士のイメージと職業選択の基準. 植草学園大学研究紀要, 5, 95-101.
- 一般社団法人全国保育士養成協議会 <http://www.hoyokyo.or.jp/profile/index.html> (2017年11月25日閲覧)
- 石山貴章, & 安部孝. (2008). 保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題 (1): 短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して. 紀要 visio: research reports, 38, 157-170.
- 石山貴章, 安部孝, & 田中誠. (2010). 保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題 (2): 実習事後指導を通じた「自己評価」と「気づき」に関する分析から. 紀要 visio: research reports, (40), 59-72.
- 貴田美鈴, 谷口篤 (2012). 保育実習 (施設) の事前指導と実習後の学生の意識: 実習の期待感と不安感, 及び実習成果の自己評価. 岡崎女子短期大学研究紀要, 45, 21-28.
- 厚生労働省. 幼稚園教諭免許状を取得している者を対象とした特例講習
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/hoiku/tokurei.html
(2017年11月27日閲覧)
- 厚生労働省. 保育士確保, <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/osirase/140131-1.html> (2017年11月25日閲覧)
- 倉本義則. (2009). 障害者施設実習に対する不安: 不安の因子構造および不安と経験との関係. 京都女子大学発達教育学部紀要(5), 21-30.
- 野田敦史, 藤田雅子, & 藤田雅子. (2011). 保育士の専門性における構成要因の検討-保育士志向学生の自己評価から. 東京未来大学研究紀要, 4, 37-43.
- 小倉毅, & 土谷由美子. (2009). 保育士養成課程における施設実習に関する課題—アンケート調査からの一考察—. 中国学園紀要, 8, 77.
- 大森弘子, 太田仁, & 水谷弘正. (2014). 保護者が期待する保育士の専門性: 保育士のキャリア

アパスを通して. 社会福祉学部論集, 10, 1-10.

清水里美, 吉島紀江, 志澤康弘, & 藤本史. (2013). 保育士養成課程における実習指導上の留意点: 施設実習の事前指導における教育内容の検討. 平安女学院大学研究年報, 13, 19-28.

土谷由美子, & 平尾太亮. (2014). 保育士養成課程における施設実習に関する課題 II-現状と約 10 年前の比較. 中国学園紀要, 13, 31-36.

矢野洋子. (2011). 保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討. 九州女子大学紀要, 48(1), 129-138.

全国保育士会. 全国保育士会のあゆみ, <http://www.z-hoikushikai.com/about/donnna/ayumi.html>
(2017 年 11 月 25 日閲覧)